

特別州法制定によるジョクジャカルタ王家の文化イニシアティブの復権
—2019 年を元年とした新世代の王家指導者の活動を中心に—

Comeback to Cultural Initiative of the Yogyakarta Court by Privilege Law: Focusing
on the Activities of a New Generation of Royal Leaders Starting in 2019

岡部 政美 (アジア太平洋無形文化遺産研究センター)

OKABE Masami (International Research Center of Intangible Cultural
Heritage in the Asia Pacific Region)

地方自治への移行により各地で文化の再編が進むなか、長くジョクジャカルタ特別州では特段の変化はみられなかった。ところが特別州法 (2012 年) と、いくつかの関連法を法的根拠として近年、ジョクジャカルタの文化状況が変化している。特に 2019 年を元年とする王家の若い指導者たち (現スルタンの子と配偶者) の強いイニシアティブにより、若者を取り込んだ急速かつ強力な、王宮文化の再活性化と王家の体質の変化がみられる。

王家は 2019 年 6 月に王宮舞踊を用いたフラッシュモブ (ゲリラ的集団パフォーマンス) を繁華街で行い映像を YouTube で公開した。この映像は瞬く間に人気となり、各地で同様のフラッシュモブが行われるなど、王宮文化の風変わりな在り方に人気の火をつけた。これは 1) 王宮舞踊団の繁華街での上演、2) 文化の普及を強く意図した点で、以前の王家の性質とは異なった。なぜなら王宮文化はスハルト時代の文化政策により、州を代表する地方文化の地位を確立したものの、王宮周辺に集中するという性質を変えていなかったからだ。とりわけ王宮舞踊は元貴族層を中心とした営みであることに変わりなく、王族を中心に封建的な性質にあった。

注目したいのは王家は次々と王宮儀礼の生中継、ショッピング・モールでの王族のトークショー、それらの SNS での発信など、文化の普及という点では、新たな方法を用いつつ、活動の基本は伝統的でアディ・ルフン (崇高) な王宮文化の継承におくこと、およびそれらの庶民への普及を意図していることにある。短編コメディ映画による王宮マナーの紹介、ジャワ芸術の教則映像の制作、植民地期の文化の展示や古い舞踊の復活上演などが、それである。

本発表では、このような活動を可能とした特別州法と関連法の分析、王家の情報発信の中心となっている YouTube 上での映像 (2017 年から 2021 年 9 月までの 302 本)、および王家のホームページの内容から、現在の王宮文化と王家の性質について分析する。